無政府狀態からくる景氣の變動、恐慌、事業の破綻、季節工業の變化などにもとづく失業。

(一八)新しい機械の發明、新しい生産行程や新しい管理方法の採用の結果として生ずる失業の增加、すべてこれらの失業と半失業狀態、職業の不確實からの不斷の恐怖などは、人生そのものおそるべき浪費である。生産が社會の統制のもとに行はれる場合には、新しい機械や方法の採用は、失業者を生ずるかはりに人間の勞働を輕易にし、勞働時間を短縮し、勞働狀態を衛生的にし、または愉快にし、なほその上に、これによつて社會の全員が、その生産物を一そう豐富に享有することができる。

(一九)工場、鑛山その他の採光、通風、煖房その他の衛生設備の不完全からきたる健康の破壞。職業病の增加。資本主義のもとでは、資本家には勞働者の健康や幸福を增進しなければならぬなんらの理由も動機(慈善的な動機以外には)もない。奴隷の主人は奴隷の健康をも所有したが、近代賃銀奴隷の傭主は、たゞ勞働力の買ひ手であつて、今日その雇傭してゐる勞働者の健康を改善しても、明日は彼の競爭者がその利益を收獲するかもしれぬ。そこで機械や設備よりも人間の生命が安價であるかぎり、資本家は勞働者の生命を濫費する。

(二〇)危險防止裝置の不完全からきたる職業上の傷害。この點でも、資本家は高價な設備よりも、安價な勞働者の生命で支拂はうとする。

(二一)母親の雇傭、幼少年勞働からくる勞働階級の一般的な體力の低下。

(二二)一方には、筋肉の單なる機械的な運動にすぎないものとなつた單調な勞働と、他方には、極度に速力の增加した機械の運轉のために、極度の注意を緊張する必要とのために生ずる精神上肉體上の影響。

(二三)勞働大衆の貧困、衣食住の不充分、過度の勞働からきたる死亡率の場加。過勞と絶望的な生活からきたる過度の飲酒、精神的打擊などによる疾病と死亡。

道德上の廢頽 これらは資本主義に含まれてゐる人間の肉體的な浪費であるが、資本主義は人間の精神上道德上にも、おそるべき廢頽的な影響を及ぼしてゐることを忘れてはならぬ。

(二四)資本主義の發達した國々においては、國民の富の大部分が、きはめて少數の大富豪の一團によつて掌握せられ、社會の多數者は、現實に貧困からきたる肉體上の苦痛をうけてゐる。そして貧困はあらゆる種類の犯罪と社會的害惡の直接間接の原因となつてゐる。賣淫のごときその一つである。

(二五)社會の大多數者には、最低の生活をつゞけるための長時間の勞働によつて、肉體上精

神上の正常な發達の餘裕が奪はれてゐるばかりでなく、その機會が拒まれてゐる。すなはち教育をうける機會も才能にしたがつて與へられるのではなくて、ただ金錢によつてのみ買ふことのできる特權となつてゐる。

(二六)貧困が、社會の多數者を精神的の廢頽と無節制とに陷いらしめてゐる一方には、富の占有者自身も、また利潤の獲得に熱狂し、智力上道德上の發展を妨げられてゐる。享樂の機會の獨占による有閑階級の精神上の墮落は、貧困による罪惡よりも一そうはなはだしい。

(二七)かりに社會の大多數者が貧困からうけてゐる肉體上の苦痛が救濟され、すべての勞働者が相當の生活を保障せられたと假定してみても、利潤をうることを動機として生產が行はれるといふ事實そのものによつて、人間の精神生活を墮落せしめることは同一である。資本主義のもとにおいては、利潤慾と所有慾とは、必然にあらゆる社會生活に浸透する。

(二八)生產が利潤の收得を目的として行はれるかぎりは、消費者たる社會公衆の利害は第二義的なことであつて、つねに消費者に對して、企業家や商人の不正が行はれる。そして資本主義の根本原則が是認せられてゐる以上は、何人もこれらの不正を責める權利はない。

(二九)勞働者を使用人とにたいする傭主の不正。

(三〇)同時に、商品勞働の賣手としては、勞働者は賣渡した勞働力を交附すること以上に、生產に對してなんらの關心をも有しない。したがつて生產技術者としての勞働者の資質は墮落する。

(三一)資本家のあひだ、企業家のあひだにおける競爭にもとづく不正。

(三二)利潤の獲得を動機とする政府および政治の腐敗と墮落。

(三三)大衆が經濟生活において少數者に隷屬してゐる結果として、政治上においても、民主的な精神はまつたく破壞せられる。であるから資本主義のもとにおいては、普通選擧にもとづく政治といへども、かならずしも民主的な政治とはならぬ。

(三四)利潤慾と所有慾の鬪爭に勝利をえたものが社會の優越者であるといふ觀念と實踐とは全社會のあらゆる層に浸潤する。

(三五)一切のもの〻價値は貨幣によつて量られ、すべてのものは商品化する(人間の節操もまた!)。

(三六)資本主義の精神から發散するすべてかやうな心理は、全社會の俗惡な雰圍氣を作つてゐる。市街、住宅、工場、服裝、その他の流行、文藝、富裕者の享樂はもとより、資本主義の

上に發達した文化そのものが、この俗惡な烙印をおされてゐる。

（三七）社會の上層が奢侈と享樂と所有慾とのために腐敗し、社會の下層が貧困の現實な肉體的苦痛のために墮落するばかりでなく、その中間にある廣大な社會層は、生活の不斷の動搖と不安のために、ます〳〵强烈な刺戟をもとめて刹那的な享樂主義に墮落する。かうして奴隷勞働の搾取が、古代社會の生產力を枯渴せしめたばかりでなくあらゆる社會層を道德的に腐敗せしめて自滅に急いだと同じやうに、近代の賃銀勞働搾取の制度は、資本主義社會の生產力を破壞し、生產力の發展を阻止するばかりでなく、その一切の社會層を精神的に墮落させ、社會の根柢を精神的に掘り崩してゐるのである。

（一二）資本主義は何處へゆく

資本主義は何處に到着してゐるか？　以上によつて、吾々はまづ第一に、資本主義はどのやうにして生まれたかを知つた。次には、この資本主義と名づける特殊な社會形態の根本的な特質は、何であるかを見た。その次に、吾々は、資本主義はどのやうな法則によつて發展せしめられてゐるかを吟味した。この吟味の結果として、吾々は次のごとき事實に到達した。

（一）資本主義はその固有の法則によつて、人間社會の生產力をいちじるしく增大した。

（二）けれども、同時にこの同じ法則は、社會の壓倒的な大多數を、これらの生產物を消費する力のないものにした。したがつて資本主義は、この增大した生產力を充分に利用することができなくなつた。

（三）內國におけるかうした矛盾は、植民地や外國市場によつて一時は緩和せられるが、各國の資本の世界的な競爭によつて、國內的な生產の無政府狀態は、やがて世界的規模において複生される。その行き詰りは、國內的には恐慌であつて、國際的には戰爭である。

（四）資本主義の發達は、社會の大多數の隷屬狀態と生產の無政府狀態を除去しないで、ますますこれを擴大し强烈にした。金融資本の發達と企業の獨占化とは、國內的には競爭を緩和するが、國際的には一そうこれを激烈にし、人間社會の生產力と、生產物と、人間そのものとの大規模な破壞である帝國主義的世界戰爭を目指して、まつしぐらに進んでゆく。

そこで吾々は、次のやうな事實を見せしめられる――すなはち每朝職業紹介所のまへに勞働者が殺到する光景、一錢を强奪して三年の懲役に處せられた一人の失業者、卒業期をひかへて每日の新聞につたへられる就職難、强盜、殺人、親子心中のいたましい報道から、政治家の收賄沙汰、街頭にひるがへる超特大安賣の五色の旗と小資商人の悲鳴の聲、農民の呻吟、大小の罷業と小作人の爭議、歲末におし迫つてボーナスと減俸の心配、それから最後に、全世界の大政治家がありたけの智惠を絞りあふいろ〳〵の國際會議、幾百萬幾千萬の人間を大砲の餌にする帝國主義の世界戰爭――すべてこれらのもつとも小さな日常の出來事から、全世界を震撼するもつとも大きな事變にいたるまで、すべてこれらの社會事象は、おの〳〵孤立したべつべつの事柄ではなくて、資本主義を動かしてゐる同じ法則によつて貫かれてゐるところの、一つの現象の種々なる方面であるといふことである。そして資本主義は、どのやうな法則によつて、どのやうな方向に動いてゐるかを明らかにしたときに、かうした社會現象の眞實の意味は初めてはつきりと理解することができる。

資本主義はその固有の發達の法則によつて、今、かういふ地點に到着した。それは何を意味してゐるだらうか？　いふまでもなく、次のやうな事柄を意味してゐる。

もし資本主義の經濟が、社會の全員はその生活の必要に應じて生產物の分配にあづかるといふ建前の上に立つてゐたならば、生產力の增加が失業者を生じ、生產過多を生じ、市場にたいする競爭をひきおこし、原料の產地と植民地との爭奪を生じ、帝國主義戰爭をひきおこすだらうか？　斷じてさういふことはない。社會の生產力が增加すればするだけ、社會の全員は、生產のためにより少しの勞働をし、より多くの時間を文化的な發達のために費やし、しかもその生產物をより豐富に消費するやうになる。ただそれだけのことである。

そこで資本主義が吾々の社會のうちに發達させたこのおどろくべき生產力は、もはや資本主義の生產關係のもとにおいては――言葉をかへていへば、生產手段が社會の少數者の獨占的な所有物であり、したがつてその生產物はこれらの生產手段の所有者の獨占的な所有に歸する、そして社會全體を給養するための生產は、これらの生產手段の所有者の利潤慾を直接の動機と

し直接の目的としてのみ行はれるといふ建前では――充分に利用することができなくなつた。いはんや生産力のこれ以上の發展と增大とは、このやうな生産關係、このやうな經濟の建前のもとには、とうてい不可能となつた。もう一度言ひかへれば、社會の生産力が社會の生産關係と矛盾し、對立し、たがひに抗爭しあつてゐる。そして資本主義はその固有の發展の法則によつて、いまや恰かもかういふ地點に到着したのである。

そこで、この同じ資本主義の法則は、これから資本主義を何處に導くだらうか？　資本主義は何處に行くのだらうか？

資本主義社會は滅亡するか　資本主義の行くへについて、二つの場合を想像してみよう。

吾々はこの講話のはじめにおいて、人間の社會は、究極においては、自然のうちから生存の資料を獲得する組織――すなはち生産の組織――であることを見た。この生産の組織は、人間の生産技術の發達と生産力の增大とに應じて、いろ〳〵な形態をとつて變化した。そこで原始の血族的な共産制度から、奴隷國家、封建制度といふやうな、いろ〳〵な社會形態がつぎ〳〵に現はれた。

これらの社會形態のそれ〴〵が、それ以前の社會形態をおしのけつゝその内から發達してきたのは、要するに新たに生れた社會形態の方がより多くの生産力を代表し、より有效に社會全體を給養する能力をもつてゐたからであつた。けれどもいかなる社會形態も、そのうちに矛盾の萠芽をふくんでゐる。そしてその社會形態を發展せしめる法則は、同時にこの矛盾をも發展させる。かうして、かつては人間の生産力を發達せしめるものだつた社會形態――生産の建前――生産の關係――が、後にはかへつてそのなかで發展しようとする生産力と對立し、これを妨げるやうになる。ちやうどかうした時期に達したとき、その社會形態は、それが生まれ出で、生長し、發達し、そして、それ以前の社會形態にとつてかはつた歷史的使命を完了したものである。かうして今日までに、いろ〳〵な社會形態はその歷史的使命を完了したときに、さらにより多くの生産力を代表し、さらにより有效に社會全體を給養する能力のあるところの、新しい社會形態によつて代はられたのである。

原始の共産社會は、なにゆゑに崩解したらうか？　いふまでもなく、そのうちに發達せしめた生産力が、血族的な共産制度といふ生産關係と矛盾するやうになつたからである。言葉をかへていへば、血族的共産制度の建前では、もはやこの生産力を利用しきれなくなり、したがつてまた、この建前のなかでは、生産力をこれ以上に發展せしめることが出來なくなつたからで

あつた。

そこで吾々の資本主義社會も、ちやうどかういふ狀態に達してゐると假定しならば——すなはちその內に發展しようとする生產力が、資本主義の生產關係に突き當つてゐるとしたならば——この生產力がこの障壁を突破して發展することが出來るかどうかによつて、資本主義社會の未來はどうなるか〻決定する。もし生產力の發展が、資本主義の生產關係を突破して進むことができない場合には、どうなるか？　それは現存の生產關係がそのまゝ存續することであり、したがつて資本主義の社會形態がそのまゝ永久に存續するといふことではないか？　決してさうでない。資本主義の法則が、今後も永久にこの通りの作用をし續けるとしたならば（固よりさういふことはありえぬが）、社會の富と生產手段とは、今日よりも一そう僅かな人々の手に集中され今日よりももつと廣大な社會の部分が無產階級化され、ちやうど古代國家の末年に社會が少數の大貴族と疲弊した奴隷群とになつてしまつたやうに、資本主義社會は、少數の資本主とこれに隷屬し屈伏した、搾取によつて疲れはてた賃銀奴隷群とに歸着するだらう。かうして社會の生產力はぜんじに衰頽し、ちやうど奴隷の勞働を搾取しつくした古代國家と同じやうな光景を呈するにちがひない。そして資本主義の發展した一切の文化の跡には——その鐵筋

コンクリートの建物の跡には——それこそペンペン草が茂るだらう。

かういふ事態も、かならずしも想像のできないことではない。現に大戰後のヨーロッパの交戰國では、生產力はいちじるしく衰頽した。英國においてさへも、主要工業のいちじるしい衰退を見た。そして英國の資本主義が生產力を恢復する望みをもつやうになつたのは、ほんの近頃のことであつた。けれども辛うじて危機を脫したヨーロッパの資本主義は、さうする一歩ごと、新しい危機に近づいてゐる。かうして世界資本主義のうちに發展してゐる矛盾をふたゝび戰爭によつて淸算しなければならぬとしたならば、來るべき世界戰爭は、おそらくはその規模においても慘禍においても、かつての世界戰爭を數倍したものとなるにちがひない。アメリカと太平洋とが渦卷きの中心にはいることによつて、來るべき世界戰爭は眞實に全世界の戰爭となり、ヴェルサイユの媾和以後において戰術を一變するにいたつた新たな精銳な武器と、各國の軍備の擴張とによつて、十倍の血が流されるに相違ない。かうした大破壞のあとで、資本主義はもはやその生產力を恢復する氣力を失ひ、かつて大規模機械生產の行はれた廢墟で、人間社會はもつと低い發展段階から、ふたゝびその發達を新規まき直しにやり始めるといふことも——少くとも想像に富んだ人々には——かならずしも考へられないことではない。

けれどもこれはひつきやう資本主義社會が存續するといふことだらうか？　斷じてさうでない。資本主義社會がもしかういふ方向を取るとしたならば、それは現在の社會形態とその文化とが滅亡することを意味してゐる。

資本主義社會は發展するか？　人間の社會とその文化とが滅亡するといふことは、決して幻想者の空想ではない。人間の歷史のうちには、社會とその文化との、さうした滅亡の實例がいくつもある。高度の文化を發展させた古代の國家は、その搾取によつて土地と奴隸の勞働力とを枯渴させ、富の集中によつて、すべての階級を道德的に廢頽させた。そして滅亡した。

けれども奴隸勞働の上に立つ古代社會と、賃銀奴隸の勞働に立脚する近代資本主義の社會とのあひだには、あらゆる類似があるにもせよ、重要な點において相異がある。すなはち（一）古代社會は生產力の枯渴によつて滅亡した。そこには奴隸國家のうちから新たな社會形態を發展しだすやうな、なんらの新しい生產力も發達してゐなかつた。それに反して、吾々の資本主義社會は自らその內に發達せしめた生產力によつて脅やかされてゐる。また（二）古代國家の奴隸が凋落する生產力を代表してゐたのに反し、資本主義社會における賃銀勞働者は、新な生產力を代表し、新興の階級として現はれてゐる。

そこで吾々は、資本主義社會の滅亡といふ陰慘な光景から、この行き詰つた資本主義社會がそのうちに貯へてゐる生產力といふ生命の力によつて新たな發展を遂げ、さらにその生產力を發展させるといふ、明るい光景に轉じよう。

資本主義社會が滅亡するかはりに發展するといふことは、言葉をかへていへば、資本主義の生產關係といふ卵のなかで生長してゐた生產力の雛が、その殼を破つて孵化することである。すべての新しい形態の社會は、決して突如として湧き出したものではなくて、古い社會形態のうちからじよ〳〵に發展した。生產力の發展は、血族共產社會の關係をじよ〳〵に變化した。そしてこの變化がある程度に達すると、血族共產社會は、もはや血族共產社會と名づけるかはりにたとへば封建社會と呼ばれることを適當とするやうな新たな社會形態となつた。かういふ意味において、封建社會は血族共產社會の發展であり、その續きであると同時に、その否定でもあつた。すべての雛は、卵の發展であり續きであると同時に、卵の否定である。卵の殼の否定でないところの、卵の發展はありえない。

そこで資本主義社會の發展は、資本主義そのものゝ否定によつてのみ行はれるといふことになる。これは必ずしも不思議なことではない。現に今日までも、資本主義は自分自身を否定す

ることによつて發達した。たとへば資本主義の根本法則の一つは、自由競爭であつた。ところが自由競爭の結果は、生產手段をます〳〵少數の中心に集中し、さらにこれらの大中心の合同や結合によつて獨占的な資本となり、少くとも國內的には、自由競爭の原則を否定した。この集中の作用がさらに進行して、遂には、すべての產業部門の生產手段がごく少數の大中心に集中されたとしたならば、どうだらうか？　さらにこれらの少數の大中心から、國家または社會全體の手に集中されたとしたならば、どうだらうか？　資本主義は自分自身に固有な發展の法則の作用によつて、資本主義そのものを否定していまや資本主義ならざる何ものかに轉化したことになる。かやうに資本主義は、依然として資本主義であるあひだにも決して同一の資本主義ではなかつたのであるが、さらにこの變化がある程度に達すると、それはもはや資本主義と呼ぶことを不適當とするやうな、資本主義とは異なつた本質をもち、異なつた法則によつて支配せられるところの別個の生產の組織に轉化する。

資本主義の卵の殼のなかで生長した生產力がなほその發展をつゞけるとしたならば、それは資本主義の生產關係といふ卵の殼によつて壓倒され窒息せしめられる代りに、この卵の殼を、生產力の發展に適合したやうに變化してゆかなければならぬ。そしてこの變化がある程度に達したなら、資本主義の生產關係は、もはや資本主義ではないところの、そして資本主義とは本質的に異なつたところの、ある新たな生產關係に發展する。この新たな生產關係と、その上に築かれる新たな社會の組織形態をさして何と名づけるかはもとより重要なことではないが、科學的社會主義は、これを社會主義社會と名づけてゐる。

かやうに科學的社會主義は、現在の社會を改鑄するための、一定の鑄型を持ち合せてゐるものではない。いはんやこのもち合せの鑄型のなかに、むりやりに社會を押しこまうとするものではない。いな反對に、動物學が卵から發展した新たな生命の形態を雛と呼ぶやうに、また生物學が、卵から雛への必然的な發展の法則と作用とを明らかにするやうに、科學の社會主義は、資本主義の生產關係が新たな生產關係へ必然的に發展する法則と作用とを明らかにし、この新たな生產關係にもとづく社會の新たな形態をさして、社會主義社會と名づけただけである。

そこで吾々の資本主義社會が、滅亡の代りに、かうした新たな發展を遂げるとしたならば、この新たな社會――すなはち人間が自然のうちから生活資料を生產するこの新たな組織――はおほよそどのやうな性質をもつだらうか？

社會主義社會の特質　社會主義の社會とは、資本主義の社會を破壞した跡へ、どこからか全

く異なつた社會組織をもつて來て置き代へたものではなくて、科學的社會主義が理解するやうにそれは資本主義社會の發展として、資本主義によつて發達せしめられた生產力の發展として實現せられる新たな社會形態であるとしたならば、それはおほよそどのやうな性質をもつだらうか？

まづ第一に、資本主義のもとに發達した人間の生產力は、そつくり保存され、これが新しい社會の基礎となることは疑ひがない。そこで新しい社會は、おの〳〵の勞働者がおの〳〵『自己の』生產手段を『所有』した手工業制度への復歸でもなければ、弓矢の獲物を共有する原始の生產制度への復歸でもなくて、大規模な機械生產の行はれる社會である。そして資本主義のもとでは、資本主義そのもの〻矛盾のために沮まれてゐた機械生產が一そう發達することによつて、この新社會ははじめて完成されるにちがひない。

しかしかういふ大規模な、その性質においても社會的となつた生產手段は、もはや少數の個人によつて所有され、社會の大多數の勞働力から利潤を搾取するために用ひられるものではなくて、社會の全員を給養するといふ明確な目的のために用ひられるものとなる。言葉をかへていへば、これらの生產手段はもはや賣るための品物、すなはち商品を生產するためには用ひられないで、社會の使用を目的とする品物の生產に用ひられる。すなはち商品ではなくて、單なる生產物が生產されることになる。

そのためには、これらの生產手段は、いかにして最大の利潤が獲得できるかといふ見地から資本家や資本家の一團によつて支配せられるものではなくて、社會全體によつて支配され、社會全體の利益と必要との見地から利用せられるものとなる。そして生產は、市場にたいする思惑や、投機や、競爭によつて行はれないで、一切の品物は、社會の全員の必要を充たすためにこれ〳〵の品物がこれだけ必要であるといふ、正確な統計にもとづいて生產される。そこで今日のやうな競爭と生產の無政府狀態とにかはつて、社會の生產は意識的、計畫的、組織的なものとなる。

これは工業のみではない。資本主義のもとでは、資本は利潤を追うて農業から工業に流れこむ。しかし新しい社會では、生產手段は社會の必要に應じて、農業と工業とのあひだに適當な割合で分配される。そこで今日は引合はぬために採用されないやうな、おほくの機械や耕作の方法が採用される。そして農業と工業とのあひだには、もはや今日のやうな對立はなくなつてくる。かうして新しい社會は、工業をも農業をも引つくるめた、一つの大きな協同組合的な生

産の組織になる。

分配の方面はどうかといふと、分配の方法は、生産の方法によつておのづから決定される。生産手段がすでに社會全體、ないしは國民全體のものだとすれば、そしてこの生産手段が、社會全體を給養するといふ明確な目的で使用されるとしたならば、その結果として生産された品物は、いきほひ會社全體、ないしは國民全體に屬することゝなる。そこでこれらの生産物は、國民の共同の倉庫に收められる。

このやうな社會の全生産、すなはち國民の全所得のうちからは、まづ第一に、消耗した生産手段を補充し、さらに必要な擴張を行ふために必要な分量が引き去られ、つぎには社會全體の公共の費用が差引かれる。そしてその殘餘は、おそらく共同の倉庫から、おの〳〵の地域における配給の機關に分配されるに違ひない。

ではこれらの配給機關からは、どのやうにして最後の消費者たるおの〳〵の個人または家族に分配されるだらうか？　もし吾々の新社會の生産力が非常に大きく、生産物が充分に豐富な場合には、すべての人々をして、各々その必要なだけの分量を配給機關から自由に受け取らせることもできるだらう。實際ある種の品物は、比較的はやくかういふ狀態に達するかもしれぬけれども、おほくの品物は、かならずしもさうでない。そこで全體として見た場合、生産物がそれほど豐富でないかぎりは、おの〳〵の人は、社會全體の生産に貢献した割合によつて、生産物の分配を受けることになる。そしてこの割合をさだめる尺度となるものは、勞働の難易や勞働の强度や、勞働の愉快と不愉快などをすべて計算に入れて割出した勞働時間のほかにはない。そこでたとへば社會の各人は、その勞働に對して勞働券を交附される。この勞働券には、その人が社會の生産のために行つた勞働の分量が、前述のやうな勞働時間の單位で記入せられてゐる。そしてこの勞働券と引換へに、配給機關から好みの品物を所要の分量だけ受取ることができる。いづれにせよ、社會の生産力がかういふ範圍内にあるかぎりは、生産物の分配は、生産に貢献した割合、すなはち勞働の分量に應じて行はれることになる。

では社會主義の世の中にも、依然として私有財産があるではないか？　かう反問する人があるかも知れぬ。人々が社會的生産に貢献した程度に應じて社會的生産物のうちから分配せられたものにたいしては、おの〳〵の人は自由に處分する權利をもつてゐるといふ意味なら、新しい社會にも、確かに私有財産があるといつてよい。また人々は、その勞働券の全部を米に代へようと、牛肉に代へようと、餡パンに代へようと、それとも書籍に代へようと、自由であるば

かりか、一生涯飲まず食はずで勞働券――この私有財産――を貯蓄することさへも自由である。しかしかういふ私有財産が存在し、私有財産のかういふ貯蓄の行はれることは、吾々の新社會にとつては少しも不都合を生じない。

けれども生産が社會全體のために統制せられるやうに、分配もまた社會全體の利益のために統制される。そこで勞働の能力のない幼兒や老人や病人などにたいしては、社會は扶養の義務を負ふ。また幼兒や青少年にたいしては、社會が生活を保障するばかりでなく、公の費用をもつて必要な教育が行はれるにちがひない。すなはち人々は、おの〳〵その購買力に應じて教育を買ふ――言ひかへれば、各人の財布の重みに比例して教育が分配されるのではなくて、各人の必要に應じて――すなはち人々の才能に應じて――社會全體の負擔によつて教育の機會が與へられることになる。また醫療であるとか、またはその他の文化の成果を享有する機會も、ある程度までは、人々の必要に應じて與へられるにちがひない。そこでかういふ點では、勞働に準じない分配が行はれることゝなる。またこれに反して、とくに供給がかぎられてをり、しかもその品物が、幼兒や病人にとつて特別に必要なといふやうな場合には、一般人の消費が制限せられるにちがひない。

かやうに生産も、したがつてまた分配も、協同組合的に行はれる社會では、もはやある人々による他の人々の勞働力の搾取はありえない。すべての人と人との生産における關係は、單なる協同者であつて、もはや生産手段の所有者と勞働力の賣手との關係は存しない。そこでかういふ意味での――すなはち生産關係のうちに、利害の相反した位置におかれてゐるといふ意味での――階級なるものも存しない。そこで新しい社會は、資本主義社會の根本的な矛盾の一つである階級の對立の消滅した社會であつて、したがつてまた、一つの階級が他の階級を政治的に支配するといふ事態も消滅し、したがつてまた、かうした階級的支配のための一切の組織と機關もまた消滅するにちがひない。

資本主義に代るべき社會形態は、資本主義の內部に生長した矛盾――究極においては、資本主義の生産關係と、そのうちに發展しようとする生産力との矛盾――が發展し、この矛盾の發展によつて、矛盾そのものが止揚された狀態――言ひかへれば、對立してゐるものが、一だん高い水準において綜合せられた狀態――だとしたならば、それはおほよそ、かういふ特性をもつた社會形態であるにちがひない。かうした新社會の新しい生活について、こまかな想像を描いてみることもかならずしも興味のないことではない。けれども空想や單なる想像の領分に踏

みこむ危險のあるところまで、新社會の生活の詳細を描きだすことは、もとより科學としての社會主義の範圍外のことである。

（一三）階級と階級鬪爭

社會進化の必然と人間の行動　人間の社會が一つの形態から他の形態に變化するのは、吾々がそれを望んだから、吾々がさうしようと計畫したからさうなるのではない。それは究極においては、社會の生産の技術が變化した結果として、その社會のうちに働いてゐる法則の必然的な作用として、さうなるものである。であるから、一つの社會形態から、他の社會形態への變化は、人間の考へとはまつたく違つた方向に行はれることもあるし、また人間がまつたくそのことを考へてゐないこともある。實際に、過去における社會の進化發達の大部分は、無意識的に行はれたものであつた。いまから七十年前に德川幕府を倒した勤王の武士が、その跡に、今日のやうな資本の王國を建設しようと考へてゐたらうか？　かやうに社會形態の變化は、直接そのために働いた人間の考へとは、まつたく異なつた方向に行はれることが少なくない。かうした實例から考へても、社會の進化發達は一つの必然的な作用であつて、人間はたゞその道具として働くに過ぎないことが分る、そこで吾々は、前節においては、資本主義社會の發展とその

到着點とを、主としてかやうな必然的な作用として吟味した。

かやうに社會形態の變化は、最後までおしつめて考へれば、生産技術、したがつて生産力の上におこつた變化の必然の作用として、生産の樣式と生産の關係とが變化し、したがつてこれを基礎としてその上に築かれてゐる一切の社會の構造が、必然的に變化したものであるが、しかしさうした變化は、いかなる場合にも、ぜん〳〵人間を抜きにして行はれるわけではない。言ひかへれば、それはいかなる場合にも、人間の考へや人間の行動を通じて行はれる作用である。たゞ人間の考へは、社會のかうした必然的な作用とその方向とを正しく反映してゐる場合と、正しく反映してゐない場合がある。すなはち人間は、社會の必然的な變化の作用をたゞしく意識してゐない場合があり、したがつてまた、さうした作用に意識的に協力してゐる場合とまつたく違つたことを望んだり、違つた目標をさして努力してゐる場合がある。かやうに社會の經濟上の基礎に必然的な變化がおこると——たとへば機械の發明によつて生産技術が根本的に變革され、したがつて單純な道具を基礎にしてゐた生産の關係が漸次に崩壞すると——この變化は必然に、人間の意識と行動との上に反映する。すなはちかうした變化は、吾々をして何事かを考へさせ、それにしたがつて何らかの行動をさせる。ある時には、吾々は飛んでもない

ことを考へて飛んでもない行動をする。けれどもある場合には、吾々の頭は、さうした變化と方向とを正しく反映し、これに照應した行動をする。そこで人間の意識と行動はそのものも社會の必然的な變化の作用によつてひきおこされたものではあるが、こんどは逆に、この變化の作用に影響をあたへるものとなる。そこで吾々は、資本主義社會の發展の作用のうちにはかうした人間的の要素がどのやうに働いてゐるかを吟味してみよう。

階級と階級鬪爭　さきにも見たやうに、資本主義の根本的な特質は、生産手段が社會の一部の人々によつて獨占的に所有せられてゐることゝ、社會の多數の人々が、勞働力を賣ること以外に生活の資源を有しない無産者、ないしは賃銀勞働者に變つたことゝであつた。生産手段の所有者たる資本家は、勞働力から利潤を搾取する立場にある人々であり、勞働者は、資本によつて搾取せられる立場にある人々である。また生産過程において資本家は支配し命令する立場に立ち、勞働者は服從する立場におかれてゐる。そこで資本家と勞働者との利害は、あひ反してをり、資本家と勞働者とは、利害のあひ反したべつ〳〵の階級を形造つてゐる。かやうに階級とは、社會の生産の組織のうち、生産の機構のうちに人々の占める異なつた位置と持場を現はしたものであつて、資本家と勞働者とは、資本主義の生産組織のうちに、利害のあひ反した

位置におかれてゐるといふ意味で、對立した二つの階級を成してゐる。そして資本主義の社會が、資本家階級と勞働階級といふ二つの對立した階級に分裂してゐることは、資本主義社會のもつとも重大な根本的な矛盾の一つであつて、それがために資本主義社會は、もはや一つの共通の利害によつて結び合はされた渾然たる共同生活體ではなくて、まつたく別々の、しかもたがひにあひ反した利害を追求する二つの部分に分裂した。ところがこの矛盾は、資本主義の發展によつて除去せられ、または緩和せられるかはりに、かへつて擴大され增大する。資本主義の發展の結果として、社會の中流層が沒落してたえず無產階級の分量を大きくするばかりでなく、無產大衆の隷屬的な狀態のます〳〵苦だしくなることは、すでに說明したとほりであつた。かやうに二つの階級の利害の對立がはなはだしくなればなるほど、これらのあひ反した利害を追求する二つの階級のあひだの鬪爭は、激烈を加へてくる。資本主義の初期にあたつても、かういふ階級の對立は事實上には存在してゐたし、また階級と階級とのあひだの利害は、事實上にはあひ對立し、あひ鬪つてはゐたのであるが、どちらの側からもまだ明白に意識せられてはゐなかつた。けれども資本主義の發展とともに、この矛盾もまた發展する。そしてこれは勞働階級のあひだに、明白な階級の意識となつて反映する。すなはち勞働階級は、資本家階級とは根本的に利害を異にした獨立の一階級であることを意識するばかりでなく、勞働組合運動や政黨によつて、獨立した階級としての組織をもつやうになり、したがつてまた階級間の鬪爭も、無意識的な摩擦や偶發的な抗爭から意識的組織的に行はれる鬪爭に發展する。そして勞働階級が階級として生長し成熟してくると、それはもはや資本家階級とのあひだに、當面の一つ一つの具體的な利害について鬪爭するばかりでなく、階級全體としての利害——階級全體を資本の搾取から解放すること——を鬪爭の目標として意識するやうになる。

かやうに生產力の發展が、それを拘束してゐる生產關係をうち破つて進まうとする經濟上の必然的作用とあひ應じて、勞働階級の意識した運動が發達する。そこで資本主義社會のうちにます〳〵擴大し尖鋭となつてゆく階級と階級との鬪爭のうちに、勞働階級は發展しようとする生產力を代表して、資本主義の生產關係と意識的に鬪爭する役割を負はされてゐる。かやうに階級鬪爭は、資本主義社會から新たな社會形態へ推移する經濟上の必然が實際に進行するための機制となり、推進力となつてゐるものである。

資本主義はその根本的な矛盾の發展によつて、社會をます〳〵利害のかけはなれた二つの部分に分割し、そのあひだの階級の鬪爭を激烈にする。かうして資本主義は、その生產關係を打

破して生長しようする生産力の作用を意識的に代表したところの人間の行動をも造り出す。勞働階級の解放運動は、かやうな意識的な運動であつて、科學的社會主義の立場から見れば、勞働階級の運動こそ、社會主義を實現するための運動であるといふことになる。そこで近代の社會主義運動とは、もはや一般大衆の同情や聰明に訴へる少數知識分子の一小宗派の運動ではなくて、被搾取者たる勞働民の大衆的な運動をさすものとなつた。

資本主義社會の諸階級　資本家階級と勞働階級とは、資本主義社會における特徴的な二つの階級であつて、したがつてもつとも主要な階級であるが、これらの二つの主要な階級のほかにも、資本主義社會にはなほいろ〳〵の階級や社會層がある。たとへば地主、小自作農、大小の商人、俸給生活者といろ〳〵の使用人、自由職業者、その他家屋だとか株券や債券などのやうな財産を收入の源泉として生活する人々がある。かやうに種々雜多な階級や社會層があり、そして社會の經濟組織のうちにその人々のおかれてゐる位置が生産の領域を離れてゐればゐるほどその階級的の特質も、資本家と勞働者の場合のやうに分明ではなくなるが、だいたいにおいてこれらの種々なる社會層に屬する人々は、財産から生ずる收入によつて生活する人々、ないしは生産の行程中に勞働者によつて生産されそして資本家によつて收得された利潤の分け前をうけて生活する人々と、精神上肉體上の勞働または勤勞によつて生活する人々とに區別することができる。そしてこの區別にしたがつて、資本家階級と勞働階級といふ二つの主要な階級の、どちらと利害が接近するかゞ決定する。

土地は今日も重要な生産手段であるから、地主は資本家とある程度は共通の性質をもつてゐる。資本主義の社會では、農業の利害は、支配的な生産の方法たる工業の利害に從屬せしめられ、工業資本家と地主の利害は、しば〳〵あひ反してゐることがある。けれども資本主義が發達するにしたがつて、大多數の地主は、同時に商工業の資本家または銀行資本家をかねたものとなる。さらに階級闘爭が發展してくると、政治的には、地主は資本家と結合して農民に對抗する必要に迫られる。ことに帝國主義の時代になると、資本家と地主の結合した力によつてこそ、はじめてプルジョアジーの强大な政治勢力を形造ることができる。

小自作農は、一方において地主であるが、他方においては、勤勞民であるばかりでなく、その生活はむしろ小作農以上に困難であるが、おほくの場合、財産所有者の心理に支配せられてゐる。小作農は獨立の企業者たる性質をそなへてはゐるが、地主の搾取を受けてゐる點で、小自作農の場合よりもはるかに勞働者に近いところがある。大商人は純然たる資本家企業家であ

るが、おほくの小商人は、農村における小自作農に照應した性質をもつてゐる。資本主義の社會における一つの大きな社會層を形成してゐる俸給生活者は、その上層は資本家にかはつて管理的支配的な任務を遂行してゐるもので、その收入は勤勞にたいする單純な報酬のほかに、利潤の分けまへをも含んでゐる。また生活の樣式もブルジョア的である。これに反してその下層は、純然たる賃銀勞働者となんらの違ひがない。

これらの階級または社會層は、その階級的利害と彼らの支配せられてゐるイデオロギーとにしたがつて、代表的な二大階級のどちらかに加擔して恒久的または一時的の同盟を形成する。かうして資本主義社會は、いよ〳〵ます〳〵尖鋭にかつ深刻に、二つの階級勢力に分裂し、この二大勢力のあひだを彷徨し動搖してゐる中間的な社會層も、或はその一方を支持することによつて直接にまた積極的に、或は中立の立場をとることによつて間接に、また消極的に、この階級闘爭の勝敗に影響を與へることゝなる。

階級闘爭の發展　資本主義の社會における二大階級の利害の對立は、さきに説明したやうに最初はたゞ、意識されない單なる事實として存在するが、後には明白に意識せられた闘爭に發展する。資本主義の初期にあつても、勞働者は資本の搾取のために生活の極度の窮迫と壓迫を蒙つてゐた。けれども勞働者は、この窮迫と壓迫とが何にもとづいてゐるかを知らなかつた。勞働者はたゞ目前の現實な苦痛にたいして、反射的に反抗したにすぎなかつた。そこである時は勞働者は、その生活を壓迫するものは彼らと競爭する機械であると考へた。そして機械の工場の破壞を企てたこともあつた。ところがこの闘爭が發展し、勞働階級そのものも階級として生長し成熟し、その意識も進んでくると、勞働階級は自己の勞働力の搾取の上に立つてゐる生産の關係と、さういふ經濟上の機構とから完全に解放せられることを目標として闘爭するやうになる。階級の闘爭がこの段階に發展すると、勞働階級の闘爭は、ひとり勞働者の一つ一つの當面の利害のために闘つてゐるばかりでなく、資本主義の生産關係を突破して生長し發展しようとする生産力の必然的な作用を代表して闘つてゐるものとなる。そして資本家階級も勞働階級も、もはや單純に、直接眼前の經濟上の利害をのみ意識して行動してゐるものではなくて、資本主義社會における一定の歴史的役割を演じてゐる社會的勢力として、この役割を意識してそのために闘ひつゝある階級となる。

かやうに資本主義社會における二大階級の闘爭は、はじめは一つ一つの場合における賃銀の値上げとか、農民の場合には小作料の減免といふやうな、具體的な利害をめぐつて行はれる。

かうした一つ一つの具體的な利害は、主として日常生活に影響する經濟上の利害である。そしてかやうな經濟上の利害を直接の目標とする鬪爭のためには、勞働組合や農民組合のやうな階級的の組織が發達する。

しかるに階級の鬪爭が、かやうな具體的にして部分的な經濟上の利害ばかりでなく、階級の完全な解放をその目標として意識するやうになると、この鬪爭はもはや純然たる經濟上の鬪爭ではなくて政治的な性質を帶びてくる。經濟上の支配力を握つてゐると同時に政治上の支配力をも握つてゐる階級は、この鬪爭にたゞ經濟上の力を用ひることだけでは滿足しないで、政治上の權力を使用して經濟上の支配を維持しようとする。かうして階級の鬪爭は、政權を繞つて展開されるやうになり、勞働階級を中心として、農民や俸給生活者のやうな多かれ少かれ、これと共通した利害をもつた社會層は獨立した政治勢力として結合し、政治上の階級的組織たる政黨が發達する。政權が現在の支配者たる階級の手にあるあひだは、それは事物の現狀を維持する最後の力となつて働くが、政權が一度び勞働階級と、その他の無產勤勞民の手に移るや否や、それは新たな社會秩序を導き入れる力として用ひられる。政治上の革命とは、政權がかやうに一つの階級から他の階級に移轉せられること——それが急激に行はれると漸進的に行はれることを問はず、合法的にないしは平和のうちに行はれると流血によつて實現せられることを問はず——にほかならぬ。

（一四）社會主義の發展

——實踐の社會主義——

科學から實踐へ　科學的社會主義は、一般には人間社會の進化、特別にはその發展の一段階である資本主義社會の發達を、おほよそかういふ風に理解した。そして資本主義社會が必然的に到達する新しい社會形態を、社會主義の社會と見た。そして社會主義の社會をこのやうに理解したことゝ、その實現を必然的なものにする社會の進化發展の法則を明らかにしたところにその科學的な特質があつた。

では、吾々が現に見てゐる資本主義の社會は、科學的社會主義が論證したやうな法則によつて、科學的社會主義の結論したやうな社會的發展を、實際に遂げたであらうか？　資本主義の社會が、世界のどこかにおいて、科學的社會主義の豫言するやうに、資本主義でないところのある新しい社會形態に發展した實例があるだらうか？　科學の社會主義は、地球上の何處かにおいて、實踐の社會主義に發展したらうか？

この問に對してあげられる唯一の實例は、最近十年間における舊ロシアを中心とするソヴェート社會主義聯邦共和國の經驗である。

ロシア革命　一九一七年までは、ロシアにはツァーの專制政治が行はれてゐた。この專制政治の基礎となつたものは、大地主たる貴族であつて、ロシアの資本家階級は專制政治をたふし、地主階級にかはつて政權を掌握し、共和政治を宣布した。けれども地主階級の支配がたふれると、この共通の敵にたいする勞働者農民と資本家階級とのあひだの共通の利害は全く消滅し、一方には勞働者と貧農の階級と、他方には資本家階級とのあひだの鬪爭は急速に展開し、同年十一月の革命によつて、政權は資本家階級の手から勞働階級と貧農との手に歸した。そして勞働者と農民のソヴェート社會主義聯邦共和國が樹立され、人間歷史のうちに、はじめて勞働階級と農民とによつて支配せられる國家が出現した。

過渡期の經濟の特徵　この新國家では、鐵道、鑛山、工場と機械のごとき主要な生產手段は資本家の手から沒收され、國民全體のために利用する目的で、國家の所有に移されてゐる。これらの生產手段のうちで、社會的に管理することのできうる程度の大規模に集中せられたものは、國家によつて直接に管理せられたが、中小の工場は、私人たる資本家に貸下げられたもの

がある。これらの私人の企業にたいしては、國家はたゞ間接の統制を行つた。また資本の不充分のために、國家と外國資本家との合辦の會社によつて經營したものもあり、外國の資本家に租借した事業もあつた。

ロシアの人口の壓倒的な部分は農民であつて、工業化はなほ進んでゐなかつた。したがつて工業生産物のうちの大きな部分は、手工業や農民の家内工業によつて供給せられてゐた。かうした小工業は國家の管理にうつすことは不可能であつて、國家はたゞ間接的な統制を行ふことにした。

外國貿易は、原則として國家の獨占事業であるが、國家の通商機關のほかにも、國家の統制のもとにある範圍までは私的な營利會社をしてこれに當らせた。内國商業は、その一部分は協同組合（消費組合）によつて代られたが、協同組合はなほ生産物分配の一切の職分を擔當することができないので、一定の範圍内で私人の商業が許されてゐた。

一切の土地も、地主の手から國家の手に移されたが、これらの土地の大部分は貧農のあひだに分配され、農民はその使用の權利を保證された。新式の耕作方法による大農場は國家によつて直接に管理されたり、または種々なる方法による農民の共同耕作が行はれたが、大多數の土地は、とく原始的な小農制度によつて利用せられてゐた。耕作が小農的に行はれてゐるかぎりは、もとより國家の直接の管理に移すことは不可能であつて、革命以後になつてもロシア農業の大部分は、事實上土地を所有するにひとしい小自作農によつて行はれてゐたといつてよい。

そこで工業と農業と商業とを通じて、ソ聯の過渡的經濟におけるいちじるしい特徴は、社會主義の要素と資本主義の要素とが、同時にならび存してゐることである。革命前のロシアの經濟は、先進資本主義國のそれほどに工業化せられてをらず、その生産は、先進資本主義國においてのやうに、集中の作用が進んでゐなかつた。これは言葉をかへていへば、ある主要な生産の部門をのぞいては、生産手段が社會的な管理に適する程度に大規模に集中されてゐなかつたといふことになる。そこで革命後のロシアでも、社會主義的な生産のみによつては、なほ社會全體を給養するに足りないから、その範圍においては資本主義的な生産がゆるされてゐた。生産がかやうな性質をおびてゐる必然の結果として、分配の方面でも、社會主義的な分配方法と資本主義的な分配方法（商業）とがならび存してゐた。

かやうにソヴェート聯邦の經濟には、資本主義の要素と社會主義の要素とが働いてをり、社會主義の要素は資本主義の要素によつて補足せられてゐると同時に、この二つの要素は、ソヴェ

ート聯邦の經濟において生存の鬪爭をしてゐるものである。しかるに社會主義は、大規模生產によつて代表され　小規模生產には資本主義が行はれてゐる。そこでこの鬪爭において、社會主義的要素は資本主義的要素にたいして勝利をしめ、漸次にその範圍を擴大する。現に統計の數字は、私的企業による生產にたいして社會主義的生產の割合が、年をおうて增加しつゝあることを示してゐる。

かやうにソ聯における社會主義社會建設のこれまでの段階では、生產はまだ完全に社會主義化せられてゐないばかりでなく、生產が社會化せられるために必要かくべからざる條件たる生產の集中が、いまなほ進行しつゝあつた。先進資本主義國では、社會主義の基礎的條件となるこの作用は、資本主義の埒內で、自由競爭と生產の無政府狀態とをとほして進行した。そしてその進行の過程には、いきほひ勞働者と農民の隷屬狀態を增大し、資本主義社會のいろ〳〵な矛盾の增大をともなつたが、ソ聯の場合には、この過程は勞働者農民國家の統制のもとに行はれてゐる。分配の方面でも同樣であつて、協同組合による分配は私人の資本による商業と競爭してゐるが、國家は協同組合による分配を助け、この競爭の結果を、社會主義的分配の通路にみちびく役割を演じてゐる。

社會主義的要素の生長　以上は一九一七年に政權が勞働者農民の手に移つて社會主義共和國が樹立され、この新しい國家權力のもとで資本主義から社會主義への推移　第一歩が踏みだされた結果、ロシアの經濟はおよそどのやうな變化をしたか、そしてこの過渡期における經濟の特徵はおよそどのやうなものであるかについて、大樣を述へたのであるが、一九二八年の秋から、は生產の增大をめざして經濟五ヶ年計畫が實施された。この計畫が完了すると、社會主義共和國の生產力が飛躍的な增大を遂げるばかりでなく、經濟そのものゝ性質の上にもいちじるしい變化がもたらされる。すなはちこの計畫の完成によつて工業は集中化され、ソ聯は一流の工業國となつて現はれるが、これはソ聯の經濟のうちにある社會主義的の要素が壓倒的な優位をしめることを意味してゐる。農業の方面では、土地の四割を所有し、社會主義的な新しい秩序にたいして頑强に抵抗してゐた富農階級はほとんど一掃され、耕地の一大部分が機械化された集團農場となり、かくて農村經濟においても社會主義的の要素が優勢になつてくる。

こゝで注意しておきたいことは、一九一七年十一月七日の革命で政權はブルジョアジーの手から勞働者農民の手に移り、いはゆる生產階級獨裁政治が樹立せられたが、この政治革命によつて變化したのは政權の所在であつて、資本主義經濟が一擧に社會主義經濟に變化したわけで

はない。資本主義から社會主義への經濟上の變革は、政治革命によつて第一歩を踏みだしたにすぎぬ。この經濟上の變革はおそらくは長い年月を要する推移であつて、生産階級國家の權力はこの變革をうちぴき入れ、そしてこれを推移することを任務とするものである。

のみならず生産階級國家がかやうな經濟上の變革を推進する方法は、かならずしも資本主義的の經濟を强權的にとり除き、社會主義的な經濟によつて置き替へるといふやり方ではなくておほくの場合、むしろ資本主義經濟の殘存物を、未完成な社會主義經濟を補足するために利用しながら、この二つの要素——資本主義的經濟と社會主義的經濟とのあいだの生存鬪爭において、國家權力はつねに社會主義的要素を助長することにより、この鬪爭の結果を社會主義的な方向にみちびくことである。

社會主義國家の新文化　文化の方面では、むしろ經濟上の方面よりも、いつそう急激な變貌をとげた。婦人は長い隷屬狀態から解放され、生活のあらゆる部面において男子と同等の立場にたつやうになつた。生産勞働の方面でも、科學の方面でも、婦人の進出はいちじるしい。婦人は少しの割引もない意味で男子と同樣に社會主義建設の事業に協力してゐるといふことができる。

文盲をもつて有名だつたロシアの農村から、今日はほとんどそれが一掃された。青少年の教育はすべて國家の負擔で行はれ、新しい制度と新しい精神とによつて、彼らはほとんど理想にちかい教育をあたへられてゐる。科學の方面でのソ聯の進出もいちじるしいものがあり、自然科學のいろ〳〵の部門で世界の最前線に立つてゐる。かつては特權階級の獨占物だつた藝術も大衆に開放された。社會主義といへば直ちに『富の平等』を聯想する人々がある。しかしこの社會主義共和國における『實踐の社會主義』においては、かつてさうしたことが試みられたことはない。一定の年齢にある勞働能力のある者はすべて勞働の義務がある。働かざる者は食ふべかちずである。そして勞働（頭腦の勞働も肉體の勞働も）した者にたいしては、勞働の分量にしたがつて賃金ないしは給料が支拂はれる。老齢者や勞働不能者の生活は國家によつて保障せられてゐる。

過渡期の階級關係と政治形態　資本主義から社會主義への過渡期にあるソヴェート聯邦における『實踐の社會主義』がいつたいどのやうなものであるかは、以上によつてあらましが分つたと思ふ。ソ聯の經濟が、かやうな過渡的性質をもつてゐる必然の結果として、階級の關係もこれに照應した過渡的特質をもつてゐる。勞働者と農民とは政治上の支配者であるが、生産が

なほ完全に社會主義化されないで私的資本の存在がある程度ゆるされてゐるかぎり、この範圍においては、勞働者はこれらの資本にたいしては、經濟上では依然として被搾取者の立場に立つてゐる。直接に國家によつて經營せられる產業の場合においてさへも、これらの國家の經濟機關と勞働者とのあひだは、今日はなほ傭主と被傭者の關係であつて、勞働者は勞働組合の力によつて、被傭者としての利害を擁護する必要がある。また工業の方面でも商業の方面でも私人の資本が存在してゐるかぎりは、資本家階級は、よし資本主義國においてのやうに、すでに政治上の支配階級ではなくなつたにしても、なほ依然として殘つてをり、なほその上に、新たな生長發達をするかも知れぬ。農業の方面でも同じであつて、まだ貧農の大衆とは利害を異にした富農や中農がある。また新たに富農の發達する危險もある。

かやうに過渡期のソ聯においては、資本主義社會に見たやうな階級關係には、すでに大きな變化があつたに違ひないが、階級はなほ完全に消滅してはゐなかつた。したがつて階級と階級とのあひだの利害の對立は、その範圍において依然として殘つてゐた。

かうした階級關係は、いきほひ政治の性質をも決定する。階級が依然として殘つてゐるかぎりは、公然とあるひは曖昧と、階級の鬪爭が進行する。そして政治上の權力は、依然としてこの鬪爭における決定的な力として殘つてゐる必要がある。建設途上の社會主義共和國においては、國家權力は勞働者と農民とによつて、資本家と富農との階級に對して用ひられてゐる。かやうに社會主義共和國でも、政治は依然として階級による階級の支配たる性質をある程度のこしてゐるものであつて、ただ異なるところは、第一には、資本主義國家における被支配者の階級が、新たに支配の地位に上ぼつたこと、第二には、この新たな階級的支配は、現に支配してゐる階級自身をもふくめた一切の階級の消滅、したがつて階級的支配の消滅を明確な目標として用ひられてゐることである。そこで生產の社會主義化が進行し、これにともなうて階級が消滅するにしたがつて、ソ聯における階級支配の政治形態もしだいに緩和され、遂には消滅すべきものだとされてゐる。現に國內および國外において、新秩序を覆へさうとする武力的組織的な計畫が跡をたたなかつた時代には、いはゆる無產階級の獨裁はもつとも峻烈鋭利な形において現はれてゐた。それはしば〳〵反對階級にたいする力による鎭壓を意味してゐた。しかるにかやうな形をとつた階級對立が、もはや消滅した今日は、無產階級の獨裁は、主として經濟上の諸政策の形をとつて現はれるやうになつた。たとへば一定の農村經濟政策によつて、富農のあひだから新大地主の發展することを防止したり、機械の應用や電化により、または種々なる形

による集團的農業の促進によつて、農村經濟を社會主義の通路にみちびくの類である。

かやうな意味での階級支配の新しい政治形態は、いはゆる無產階級の獨裁と呼ばれてゐるものであつて、かやうに一切の國家機關は勞働者と農民とによつて選擧された代表者によつて構成され、舊資本家階級や農村の封建的勢力たる富農や、舊時代の軍人出身者などは選擧權を奪はれてゐる。そして舊秩序を代表する階級が參政權を奪はれてゐるといふ意味で、無產階級の『獨裁』なのである。

二つの見解の對立　かやうに現在のソ聯においては、社會主義はなほ實現せられてゐない。けれども現在のソ聯が、もはやたんなる資本主義のうへに立つ國家でないことも疑ひがない。地殼のなかから這ひでた蟲が、吾々の眼前で、空中を飛翔する羽根の生えた蟬に姿を變へるやうに、資本主義社會はこの國において、吾々の眼前で、資本主義ならざるある異なつた社會形態に變形しつゝある。この人類歷史における最初の社會的實驗が、世界の注目の焦點となつてゐることは少しもふしぎでない。

けれどもロシアにおけるこの社會的經驗をめぐつて、同じく科學的社會主義——すなはちマルクス主義——のうへに立つ人々のあひだにも、重大な意見の相異をきたしてゐる。革命の遂行とそれ以後における社會主義建設のために、ロシアのマルクス主義者が行つた實踐と、それを裏づける理論とを支持する人々は、現にいまロシアにおいて進行してゐる社會的變革の經路こそ、まさしく科學的社會主義が、資本主義の社會から社會主義の社會に發展する過程として論證してゐるところのものだと主張する。そこでこの見解にしたがへば、おの〳〵の資本主義國には特殊な歷史的發達の條件があるかぎりは、もとよりこの經路にも多少の相異はある、たとへば資本主義のもとにおいて生產の集中がすでに充分に行はれてゐた國々においては、無產階級國家の職分にも、當然にロシアの場合とは異なつたものがある。けれども本質的な點においては、すべての場合、資本主義社會はロシアにおいて經驗せられたやうな經路をへて新たな社會形態に發展するものだといふことになる。これに反してある人々は、ロシアの經驗は、科學的社會主義が論證した社會的發展の過程とはあひ反してゐるものだと主張する。反對論のもつとも主要な見解はつぎの二つの點に歸着する。

まづ第一に、經濟上の方面では、資本主義社會が社會主義社會に發展するためには、そのうちに含んでゐる一切の生產力を發展し盡さねばならぬ。そして社會主義の社會は、充分に發展し增大された生產力を資本主義から遺產として承けついでのみ、はじめて實現せられるもので

ある。そこで一國の經濟は、資本主義のもとにおいて充分に工業化され、資本と企業はきはめて少數の大中心に集中され、たゞ國家の手に引き渡されるばかりに用意される。かうして一國の生産は、なんらの急激な動搖をもみないで、きはめて自然にかつ圓滑に、したがつてほんの一時的にも生産の運轉が中止したり生産が減退するやうなことなしに、新しい國家の手に引き繼がるべきものである。しかるにロシアの經濟は、その大部分が農業と小生産であつて、かやうな未發達な經濟に、社會主義の經濟を接穂することはできぬ。いはんや革命の當時は歐洲大戰のために、その生産の機構は破壞され、生産力は極度に減退し、ロシアの經濟は崩壞の狀態にあつた。資本主義のかうした荒廢の上に、社會主義社會を建設することは不可能である。

第二に、政治上の方面では、社會主義の社會は、政治的には民主々義の社會であつて、この點では、社會主義は資本主義のもとに發達し民主政治を承け繼ぐものであつて、社會主義社會は、資本主義社會の民主政治を破壞することによつてゞはなくて、資本主義のもとに發達した民主政治そのものを通じて實現せらるべきものである。そこでこの見解にしたがへば、資本主義の社會が社會主義の社會に發展し推移するためには、無産階級による政權の獲得は必要かくべからざる條件であるにはちがひないが、この政權の獲得は、暴力的な方法によつて行はるべきものではなく、資本主義が發達せしめた民主的な政治機關たる議會に多數をしめることによつて行はれなければならぬ。また政權獲得の結果として無産階級は政治上の支配者となり、資本主義國家の政治が民主的な形態をとつてゐるにもかゝはらず、事實上においてはブルジョアジーの獨裁といふ狀態を呈してゐるのと同じ意味においては、無産階級の獨裁といふ狀態がもたらされるが、これはかならずしも、資本主義のもとに發達した民主的な政治形態を破壞して、新たに無産階級獨裁といふ特別な政治形態を樹立することを必要とするものではないといふことになる。

科學的社會主義の主張者のあひだにおこつた以上のやうな見解の相異は、理論上においても實踐上においても、きはめて重要なものであり、またきはめて興味のある問題ではあるが、こゝにはこれ以上この論爭について詳細に紹介してゐるいとまがない。たゞ科學的社會主義を主張する人々は、ロシアにおける實踐をめぐつて、おほよそ前述のやうな根本的な見解の相違から、二つの對立した陣營に分れたといふことを述べるにとゞめておく。

その結果として、各國の社會主義運動も二つの陣營に分裂した。これまでは各國における勞働階級の政治運動は社會黨、社會民主黨、または勞働黨などといふ名稱をもつた政黨によつて

代表せられてゐたが、ロシアにおける實踐を是認する人々は從來の黨から分離し、べつの政黨を組織してこれに對抗するやうになつた。

（一五）社會主義と共產主義

社會主義——用語の變遷　そこで最後に、社會主義と共產主義といふ二つの用語には、どのやうな關係と歷史があるかを述べておくことも、かならずしも無用であるまいと思ふ。

社會主義といふ言葉が、どのやうにして一般的に用ひられるにいたつたかは、この講話のはじめに說明したとほりであるが、一八四七年にマルクスとエンゲルスが、科學的社會主義をはじめて系統だつた形で言ひ表はしたかの有名な『共產黨宣言』を起草したとき、彼らはこれを『社會黨』宣言とは題しないで、とくに『共產黨』宣言と呼んだ。その理由は、後年、エンゲルスの書き添へた序文のうちに說明せられてゐるとほりである。すなはち一八四七年代には、社會主義といふ言葉には、一方においてはサン・シモン、オウエン、フウリエーなどのやうな空想的社會主義が結びついてゐたが、そしてこれらの運動は、少數の知識分子の宗派的な運動にかたまつてゐた。同時に他方においては、資本主義の根柢にふれない小ブルジョア的な改良策が社會主義といふ名稱を用ひてゐた。これに反して、政治上の革命に滿足しないで、經濟組織

の根本的な變革を要求する勞働者の運動は、共産主義といふ言葉を用ひてゐた。これが一八四七年代に、マルクス＝エンゲルスがその科學的社會主義の體系を、社會主義の宣言と名づけえなかつた理由であつた。

これに反して、バクーニン派の無政府主義者は、共産主義は必然に國家の強大な中央集權的な權力を生ずるといふ理由でこれに反對し、みづから集産主義者と稱してゐた。ところが一八七六、七年のころになると、集産主義と共産主義とは、用法が逆さまになつた。すなはちマルクスの學說をとる科學的社會主義者――ことにフランスとベルギーでは――主としてフランスの空想的な共産主義思想と區別する必要から、集産主義といふ言葉を用ひたが、ロシアのピーター・クロポトキンのごとき無政府主義者は、みづから無政府共産主義者と名のつて集産主義に反對した。

かやうに社會主義と共産主義といふ言葉は、歷史的にはほとんど同意語として用ひられ、たゞその時の事情によつて用法が決定せられたといつてよい。

しかし十九世紀の末葉に近づき、マルクス主義にもとづく社會主義運動は勞働階級の政權獲得を目的とする組織された運動である、といふ性格がはつきりとして來るにつれ、それらの政黨は社會黨といふ名稱をも用ひたが、おほくは社會民主黨といふ名稱をとつた。ドイツ社會民主黨、ロシア社會民主勞働黨の類である。そしてこれらの政黨の政治行動の基準となる原則をさして社會民主主義と呼ぶやうになつた。

社會民主主義　かやうに社會民主主義とは、マルクス主義にもとづく無產階級の政治鬪爭の基準であつて、言ひかへれば、マルクスの理論の實踐行動への適用といふことになる。

さきにだいたいを述べたやうに、マルクスの學說によれば、過去における人間の歷史は階級鬪爭の歷史であつて、資本主義社會は資本家階級と勞働階級の對立した社會であり、この二つの階級のあひだの鬪爭によつて資本主義社會は資本主義でない新たな社會へと推進せられるものである。すなはち資本主義社會における階級の鬪爭は、必然的に勞働階級の勝利によつて勞働階級を解放する。そして勞働階級の解放によつて階級と階級との對立そのものも止揚され、はじめて階級のない、階級對立のない社會が現出する。

しかも勞働階級が自らを解放するための鬪爭は、まづ經濟上の利害のための鬪爭、すなはち經濟鬪爭にはじまるが、經濟鬪爭の範圍內にとゞまることはできないで、やがては政治上の鬪爭に發展する。そして勞働階級の政治鬪爭は必然的に資本家階級の手から政治權力を奪取する

ための闘争に發展せざるをえぬ。無產階級政黨は、かやうに政權奪取を目標とする政治闘争の組織であるといふことになる。

しかるに政權奪取をめざす勞働階級の政治闘争は、過ぎ去つた時代の政治闘争に用ひられたやうな、陰謀的の徒黨や、一揆暴動や市街戰やバリケードのやうな舊時代の戰術によつては展開することができぬ。ことに各國の常備軍が強大となり、武器と裝備とが一變した今日はさうした戰術はもはや時代おくれとなつた。そこで勞働階級の政治闘争は、資本主義社會がそのうちに發達させた民主主義を利用することにより、民主主義的な機構すなはち議會といふ通路によつて展開せらるべきものである。

かうした見解はドイツ社會民主黨の綱領のうちにも明瞭に言ひ表はされてゐる。一八六九年のアイゼナハ大會による綱領には『社會民主勞働黨は自由かつ人民國家の建設を目的とする……政治的自由は勞働階級を經濟的に解放するための缺くべからざる前提條件であつて……社會問題の解決はこの問題の解決を條件とし、したがつて民主的國家においてはじめて可能である』といひ、六年後のゴータ大會による綱領は『ドイツ社會勞働黨はあらゆる合法的手段によつて自由國家と社會主義社會を實現し……すべての社會的政治的不平等を除去することを要求す』といつてゐるが、さらに十六年後のエルフルト綱領には『資本家的搾取にたいする勞働階級の闘争は、必然に政治的闘争である。勞働階級は政治的權利なくしては、經濟闘争を行ひその經濟上の組織を發展せしめることはできぬ。この勞働階級の闘争に意識的統一的な闘争の形をあたへ、そしてこの闘争に必然的な目標をあたへることは、社會民主黨の任務である』と述べられてゐる。

また一九二一年ケルリッツ綱領は、ドイツ社會民主黨の努力の目標は、この黨が『民主主義と社會主義とのための闘争の組織であるといふ共通の認識と目標とによつて、すべての肉體的精神的生產者を團結せしめることである』といひ、『わが社會民主黨は民主的共和政體をもつて歷史的發展によつて與へられた改廢すべからざる國家形態と認めるものである』といつてゐる。

以上の拔萃により、社會民主黨は社會主義と民主主義との關係を、どのやうに理解してゐるかゞ明らかになつたと思ふ。

ボルシェヴィズム——共產主義　しかるに各國における社會民主主義政黨の內部には、おのづから右翼的傾向と左翼的傾向とが對立してゐたが、第一次世界戰爭の爆發を前兆するヨーロ

ッパの國際關係が日々に緊張を加へるにつれ、勞働階級は近づき來る戰爭をいかに防止すべきかについて、また一度び戰爭の勃發したならば、勞働階級は戰爭にたいしてどのやうな態度をとるべきかといふ問題をめぐつて左右兩翼の對立は尖鋭となつた。さらに戰時にあつては、交戰諸國の社會民主主義政黨の多數派は資本家階級と提携して政府の戰爭遂行に積極的に協力した。そしてこれがやがてロシア革命の影響のもとに、戰後における黨分裂の直接の動機となつた。

これより先、ロシアの社會民主勞働黨は一九〇六年の大會で、主として黨の組織問題のために左右兩派に分裂し、レーニンによて率ゐられる左翼は事實上獨立した一黨となつた。そしてレーニン派はこの大會で多數をしめてゐたところからボルシェヴィキ（多數派）と呼ばれ、その主張はボルシェヴィズムと呼ばれるやうになつた。一九一七年の革命運動を指導したのはこの黨であつて、革命後の一九一八年の大會でこれまでのロシア社會民主勞働黨の名稱をすて、右翼社會民主主義政黨から自らを區別するために、共産黨といふ名稱を採用してこれに對立した。したがつてボルシェヴィズムも共産主義と呼ばれるやうになつた。そしてヨーロッパ諸國におけるおほくの社會民主主義政黨でも、ロシア革命の影響のもとに、左翼分子はあひ次いで共産黨を組織した。かうした歷史から、今日では社會民主黨とその稱呼は、もつぱら共産黨に對立するものとしての右翼社會民主主義政黨をさすものとなり、これらの政黨の行動理論をもつぱら社會民主主義と呼ぶやうになつた。

かやうな意味での社會民主主義と共産主義とは根本的に對立したものゝごとく見られてゐるにもかゝはらず、兩者ともに、マルクス主義に立脚してゐることは爭はれぬ。そこで社會民主黨の側では、彼らの社會民主主義こそマルクスの理論をそのまゝ承けついだ正統のマルクス主義であるといひ、これにたいして共産黨の側では、ボルシェヴィズムはレーニンによつて、マルクスの理論を資本主義發展の現在の諸條件に適應するやうに發展させたもの——すなはち資本主義の金融資本主義的＝帝國主義的段階におけるマルクス主義だと主張する。そこで彼らはボルシェヴィズム——すなはち共産主義を、マルクス＝レーニン主義とも呼んでゐる。

そこでボルシェヴィズムは、およそどのやうな面で社會民主主義と鋭利に對立してゐるかについて、おもだつた項目を擧げてみよう。

（一）社會民主主義者は、一九一七年當時のロシアにおいては、資本主義の發達はおくれてをり、社會主義への變革に必要な物質的條件は、まだ成熟してゐなかつたといふ見解をとつてゐ

たことは前節に述べたとほりであるが、これに反してレーニンは世界的に見た資本主義はその最終段階たる帝國主義の段階に達してゐる。そして帝國主義の段階では、各國における資本主義の發達は均等ではないが、この資本主義發展の不均衡こそ世界資本主義の弱點であつて、資本主義の發達のおくれたロシアは、世界資本主義のもつとも弱い一環なのである。無產階級革命がまづロシアに成功したのはそのためだと主張する。

かやうに共產黨の見解によれば、世界的に見た資本主義が帝國主義の段階にはいつた今日はいづれの國においても無產階級革命の客觀的物質的の條件は適してゐるのであつて、必要なものはたゞ主觀的の條件、意識的の條件、すなはち革命の主體であるといふことになる。

(二)この主體的條件をみたすものがすなはち無產階級の前衛としての無產黨である。ロシア共產黨以前の社會民主主義政黨は、いづれも出來うるかぎり廣汎な勤勞者層を包容する大衆的の政黨であるが、これに反してレーニンが無產階級革命に必要かくべからざる主體であるとする政黨は、鐵の規律のもとに、革命的行動にたいする高度の訓練をつんだ、むしろ少數精銳の職業革命家の組織であつた。革命政黨のかやうな性格はレーニンがとくに重要視したところのもので、一九〇六年の分裂もこの問題についての意見の相違によるものであつた。

しかしかやうな意味での共產黨はロシアのボルシェヴィキ黨をのぞいては、いづれの國においても實現されなかつた。そして今日では、各國の共產黨は、いづれも大衆政黨たることを目標としてゐるものゝやうである。

(三)かやうな共產黨の指導のもとに、無產階級が政權を獲得する途は、合法的な議會を通じてゞはなくて、强力的な革命である。帝國主義の段階にはいつて反動化し、そして高度に武裝された國家においては、平和的な革命の途はありえない。

(四)かうしてブルジョア階級から奪取せられた政權を舊勢力の反抗やサボタージュにたいして防衛し、これによつて資本主義的秩序を社會主義秩序の方向にみちびいてゆくものがプロレタリア國家であつて、それは必然にプロレタリア獨裁の形をとる。無產階級獨裁についてはすでに前段に說明したのでこゝには繰りかへさぬが、社會民主主義者は、資本主義社會のうちに發達した民主主義的な政治機構をとほして政權を獲得しようとするばかりでなく、ブルジョア國家の機構そのものによつてこの政權を行使しようとする。しかるにレーニンは、無產階級は政權の奪取とともにブルジョア國家機構を破壞し、プロレタリア獨裁といふ新たな政治形態を樹立しなければならぬと主張するのであつて、この點はボルシェヴィズムのもつとも顯著な特

徴であるとされてゐる。社會民主主義者の主張も共産主義者の主張も、國家を階級支配の機構と見るマルクスの國家理論から出發してゐるものではあるが、實踐運動への適用についてのマルクスの主張――とくにマルクスの用ひたプロレタリア獨裁といふ言葉の内容――は正統マルクス派とレーニン主義者とによつて異なつた意味に解釋せられてゐるのである。

社會主義社會と共産主義社會　さて最後に、社會主義と共産主義といふ言葉のもう一つの用法について説明をつけ加へておかう。

ある場合には、社會主義とは人々が能力に應じて社會的生産に貢献し、その貢献に應じて――すなはち勞働の分量に應じて――分配をうける制度をさし、共産主義とは人々が能力に應じて働き、必要に應じて分配をうける制度をさしてゐる。たとへば無政府共産主義者は、このやうな意味で共産主義を主張して社會主義に反對する。なるほどこの二つの狀態を獨斷的な理想として見れば、兩者は對立せしめることができる。しかし社會を進化發展の過程において見れば、この二つの狀態は發展の二つの段階を代表してゐるものにほかならぬ。すなはち共産社會とは、人間の生産力が（おそらくは社會主義の時代によつて）極度に增大され、すべての物がすべての人々の必要を充分にみたすに足るほどに豐富に生産され、またその社會には、もはや前の時代の階級は、その痕跡さへも消滅し、したがつて階級による階級の支配と、階級支配の組織とはまつたくその跡をたち、社會の全員は新たな環境によつて充分に教育され、完全に新たな環境に順應した狀態――今日吾々の考へることのできるもつとも高い理想的な社會――をさすものであつて、社會主義の社會とは、資本主義の社會がこのやうな理想社會に發展する過渡期の狀態をさすものとなる。

マルクスは資本主義社會から生れる新しい社會をさして共産主義社會と呼び、この共産主義社會の第一の段階が、普通に社會主義と名づけられるものだとし、この段階においては共産主義社會は『あらゆる點において、經濟的にも道德的にも知識的にも、まだ先き頃まで宿つてゐた舊社會の母斑を負はされてゐる』。個々の生産者は『その勞働の中から共同積立にあたる分だけ引去られた後、これ〳〵の勞働を寄與したといふ證書を受取る。そしてこの證書をもつて、消費品の共同倉庫からその勞働量に相當した品物を引出す。すなはち彼はある形態で社會にあたへたその同じ勞働量を他の形態において取返へすのである。こゝでは明らかに商品交換（それが等價の交換であるかぎり）と同じ原則が行はれてゐる。内容も形式も變化してゐるのは、變化した事情のもとにおいては何人も自分の勞働以外に與へる物がないからであり、また他方

においては、個人的消費品以外には何物も個人の所有になりえぬからである。けれどもそれら、の個人的消費品が個々の生産者のあひだに分配されるといふ點においては、等價商品の交換と同じ原則が行はれる。すなはち、一つの形における同量の勞働が、他の形における同量の勞働と交換されるのである。かくして平等の權利（すなはちブルジョア的權利）がなほ原則となつてゐる。……

『この平等の權利なるものは、やはりブルジョア的な制限をおびてゐる。生産者の權利はその人の勞働給付に比例してゐる。平等とは、平等の尺度（すなはち勞働）で測定されるといふことである。……勞働が尺度となるには、その延長と强度とによらねばならぬ。……平等の權利とはすなはち不平等の權利にたいする平等の權利である。こゝではすべての人が勞働者であるのだから階級の差別はないが、自然的特權としての不平等を個人的才能が、したがつてまた不平等な實行能力が暗默のうちに承認されてゐる。……

しかるに『共産社會のより高い段階において、すなはち個人が分業のもとに受けてゐる奴隷的束縛が消滅し、したがつてまた精神勞働と肉體勞働との對立が消滅するとき、また勞働がもはや生活のための手段であるばかりでなく、勞働そのものが生活の第一の欲求となるとき、さらにまた個人の多方面な發達とともに生産力も增大して共有財産のあらゆる水源が充分に流れ出すとき、そのときはじめて狹隘なブルジョア的權利思想の水準を踏みこえて、社會ははじめてその旗の上にかう書くだらう――「能力に應じて各人から取り、必要に應じて各人にあたへる！」と』。（マルクス『ゴータ綱領批判』）

かやうに社會主義の社會とは、現在の資本主義社會と直接につながつてゐる社會であつて、資本主義社會の終りと社會主義社會の始まりとは、たがひに混ざり合つてゐる。高度に發達した資本主義の社會は、たとへば企業の極度の集中、自由競爭と生産の無政府狀態にかはる統制の發達などのやうに、部分的には社會主義的性質をおびてくるやうに、社會主義社會の初期においては、資本主義から遺傳されたおほくの痕跡がまだ殘つてゐる。社會の生産力も、まだ充分には發達しておらぬ。そこで生産物の分配は、人々の必要をのみ標準とすることをゆるされない。共産社會の場合にも社會主義の社會の場合にも、社會の富は、おの〳〵の個人のあひだに、決して平等に分配せられるものではない。たゞ共産社會の場合には、人々の必要が平等でないために、分配は平等でなくなるが、社會主義社會の場合には、人々の能力と勤勉とが平等でないために、分配は平等でないものとなる。すなはち社會主義社會の場合には、人々が社會の

生產に貢獻した割合によつて――すなはち精神上肉體上の勞働の分量によつて――分配され、したがつて人々の才能や熟練にたいしても報酬が與へられることゝなる。資本主義社會における階級も、私的資本とともに、多かれ少かれ新社會にもち越される。新しい社會秩序に對する暴力による反抗や、精神的の反抗、建設的な事業への消極的なサボタージュなども固より豫期しなければならぬ。よしこれらの意識的、計畫的、組織的な反抗は跡を絶つやうになつても、人々はなほいちじるしい程度において、資本主義のイデオロギーによつて影響せられてゐる。勞働階級自身といへども、決してふるい思想やふるい習慣から、完全には解放せられてゐない。かういふ狀態にあつては、いきほひ階級支配としての政治と、かゝる政治の組織――すなはち國家――とが、なんらかの形において、またなんらかの程度において、殘存するにちがひない。かくてこの段階では『國家は死滅しつゝある』が、なほまつたくは死滅してゐない。共產社會のより高い段階にいたつて、それははじめて完全に死滅するのである。

すべてかうした資本主義の殘存勢力を淸算するために、社會主義の社會はおほよそどのくらゐの歲月を必要とするだらうか？　科學的社會主義は、もとよりこの種の問題に答へようとせぬ。たゞ實踐と時間とがこれに答へるであらう。

（終）

昭和二十一年九月十日初版印刷
昭和二十一年九月十五日初版發行

定價拾五圓

話講義主會社

著作者　山川均　東京都神田區駿河臺二丁目十番地

發行者　藤岡淳吉　東京都麴町區霞ヶ關三丁目三番地

印刷者　中田末男　東京都神田區淡路町二丁目九番地

配給元　日本出版配給株式會社

發行所　東京都神田區駿河臺二丁目十番地　株式會社　彰考書院
會員番號 A一一九〇二一
電話神田(25)二七五七番
振替口座 東京八二一五五番

ダイヤモンド印刷株式會社印刷

目黒・柿ノ木坂
東京都立大学前
都立書房
電 717－2971

同じ著者による

本書の姉妹篇

勞働組合講話

無産者講話

資本主義のからくり

彰考書院發行